都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 57 号
平成 29 年 3 月 30 日発行
題字「つぎねふ」（山城の枕詞）
揮毫　吉田 金彦氏 （本会名誉会長）
編集　京都地名研究会事務局

第 45 回地名フォーラム報告

第 45 回地名フォーラムが、さる 1 月 22 日（日）に龍谷大学大宮学舎で開催された。糸井通浩副会長の開会挨拶の後、二つの発表（うち一つは代読）を予定していたが、急病で発表が一人になったことを改めてお詫びしたい。

参加者は会員 34 名、一般 8 名計 42 名であった。司会は入江成治常任理事。

参加者数の拡大を目指して今後ともご協力をお願いしたい。以下に各発表の要旨を掲載する。

研究発表 1

地名から仏教藍觴の地、南大阪を掘り起こす

本会常任理事　梅山　秀幸

（梅山　秀幸氏）

『今昔物語』本朝仏法部は最初に聖徳太子、次に行基、そして役の行者を扱っている。日本の仏教の三つの柱を国家（貴族）仏教、庶民の仏教、修験道に置くとすれば、仏教説話群の冒頭にこの三人を置くのははなはだ当を得ている。この三人ともにその事跡を南大阪に色濃く残していることが注目される。

和泉市を流れる槙尾川という小さな河川の流れに沿って、重要な仏教地名、あるいは遺跡が散在している。上流の「父鬼」「九鬼」は役の行者の始めた修験道にかかわり、「仏並（ぶつなみ）」は、敏達・物部守屋の廃仏の命を逃れて、池辺直氷田が仏像を隠した、その地だと伝えられている。感銘的なことに、池辺氏の家は千五百年後の現在も現地に存続している。流れを下ると、国分寺があり、そこはまた光明皇后の誕生の地といい伝え、近くに「光明池」という池もあり、それが駅名にもなっている。和泉の国分寺ができるのは平安時代のことで、それには檀林皇后橘嘉智子が絡んでいる。おそらくは和泉は県犬養橘三千代の本拠地であり、その娘の光明子、その四代の孫の嘉智子にとっても所縁の深い土地だったのであろう。息子の橘諸兄の墓と伝える古墳も行基ゆかりの久米田池の畔にあり、彼が築いたという「諸兄堤」が今に残っている。

槙尾川にそって「納花（のうけ）」というゆかしい地名が残り、槙尾寺に供える花を栽培していたという。その下流には廃寺となった池田寺があり、坂本寺があった。「戒外（かいげ）」という地名などに昔をしのぶことができるが、法隆寺再建・非再建論争に決着をつけた若草伽藍に関する論文の載った石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』には池田・坂本の両寺ともに取り上げられている。排仏派の物部守屋の故地は八尾だが、その旗下で奮戦して死んだ鳥取万とその死体を納めて飢え死にした犬の墓が並んで近くの岸和田にはある。

（梅山　秀幸記）

研究発表２

石碑で辿る京の七口（当日代読）

本会会長　綱本　逸雄

中近世の歴史古道は「京の７口」から、丹波・若狭・近江・大和・攝津・河内・伊賀へ通じる街道をへて隣国へ向った。７という数は口が７つだったという意味ではない。５畿７道の７道の口、つまり全国各地への京都の出入り口のことであった。「京の７口」という表現が一般的に使用されるようになったのは、豊臣秀吉が天正 19 年（1591）京都の周囲に御土居を築造して、そこに設けた出入口の７ヶ所がはじめという。ただし、安土桃山時代･江戸初期の公家近衛信尹(のぶただ)の日記・『三藐院記(さんみゃくいんき)』（1592～1606）に御土居建造当時の口は「十ノ口アルト也」とある。江戸時代には京都の出入口 30 ヶ所あり、乗馬乗り入れ禁止を徹底するため、「是より洛中」碑が立てられ、「是より洛中荷馬口付(くちつき)のもの乗へからす」と刻まれていた。現在は、①鞍馬口、②大原口、③荒神口、④粟田口・三条口、⑤伏見口・五条口、⑥竹田口、⑦東寺口・鳥羽口、⑧丹波口、⑨長坂口・清蔵口が知られており、大半の出入り口には「口」を示す碑が立っていた。

枚数に限りがあるので、１例を挙げると、大原口には「大原口道標」（上京区今出川寺町東北角）が立っている。洛中から大原、比叡山や近江国・若狭国へ通じる起点である。現在も今出川通寺町一帯は大原口町、南隣りに大原口突抜町の地名が残っている。高 168×幅 41×奥行 40 ㌢、慶応４年（1868）4 月建立。洛中の東西南北の各地名・距離が刻まれている。

江戸時代には、今出川寺町（旧出町）の東は行き止まりで、道はいったん寺町通を北へ立本寺前町まで上がり右折、現在の「桝形商店街」のある枡形通を東に向かって出町橋を渡り鴨川に出て、川東の田中へ渡る道筋となっていた。ただし、御土居が出来た時分は、口は単純に開いていただけで舛形（出入り口が鈎型）でなかった。江戸時代の寛文(かんぶん)年間(1661～73)寛文新堤以後桝形となる。その後桝形通ができたころ、付近の土塁(御土居)はすでに消失していた。

なお、出町橋西詰に新しい平成 13 年（2001）銘の「鯖街道口」碑（上京区河原町通今出川上ル東入）がある。ただし、「鯖街道」という名称は古代～近代には存在しない。鯖が若狭湾で豊漁になるのは江戸時代末期である（『稚狭考』）。

（綱本　逸雄記）

第 16 回総会　講演会　開催案内

日時

2017年4月23日（日）

PM 1:30～PM1:55　年次総会

PM 2:00～PM5:00　講演会

会場　龍谷大学　大宮学舎

清和館大ホール

（京都市下京区大宮通七条東入ル北側）

講演１　枕詞「あしひきの」は「峯集き」か

講師　西崎　亨氏（武庫川女子大学名誉教授）

講演２　地名の漢字

講師　鏡味　明克氏（三重大学名誉教授）

講演１

【キーワード】

あしひきの　峯（ハシ）「ハシ」の声調

【上上】・集（ひ）く　はしたて

【略歴】

武庫川女子大学名誉教授　元京都女子大学教授

（編著書）

『本妙寺本日本紀竟宴和歌　本文・索引・研究』（翰林書房）、『東大寺図書館蔵本「法華文句」古点の国語学的研究　本文篇』（桜楓社）『同研究篇』（おうふう）『高野山西南院藏訓点資料の研究』（臨川書店）、『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社）、訓点資料の基礎的研究』（思文閣出版）、『倶舎論音義の研究』（思文閣出版）

講演２

【キーワード】地名漢字（地名の國訓、国字、地方字、地名の分布、漢字地名からのアイヌ語地名の復元など）

【略歴】

岡山大学教授、三重大学教授、愛知学院大学教授を経て、現在は三重大学名誉教授。

（主な著書）

『地名学入門』（大修館書店）

『地名が語る日本語』（南雲堂）

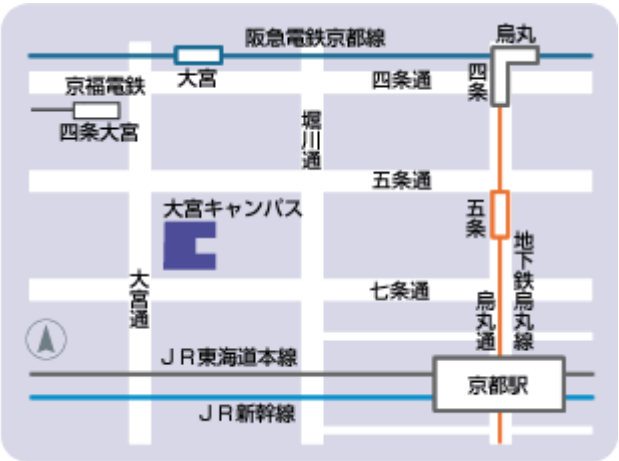
（担当解説）

「地名と漢字」『漢字講座』第三巻（明治書院）

「文化地名」「地名の歴史」

『日本地名学を学ぶ人のために』（世界思想社）

会場案内図



地名随想　連載

北山の山名　その６

本会常任理事　小寺　慶昭

若狭との国境付近に「○○峠という山名」「○○坂・○○越という峠名」が多いことは、今までも注目されてきた。例えば、北川裕久氏は『京都北山』(岳洋社・1985）で次のように述べている。

> 京都･滋賀･福井の府県境にそびえる頂を「三国峠」と称する。このあたりの山域ではピークを「峠」と呼び、峠を「坂」と呼んでいる。

「坂・越」の名称が、単なる地域性の問題ではなく、歴史的な変遷によるものと説いたのが池田末則氏である。氏によれば、古代に「坂」と称したのが、奈良時代に「越」と呼ばれるようになったという。記紀で著名な「墨坂」が「墨坂越」となったのはその一例で、重複語になっているのも面白い。それらを平安時代以降に「トウゲ」と呼び、「峠」という国字を当てるようになった。つまり、「峠」は「坂→越→峠」と、時代的に変遷してきたとする。

澤潔氏は、北山南部に「○○峠」が圧倒的に多い理由を、「平安京に近く、従って利用度による変遷の多いこと」に深く関わるとする。都の新文化の影響が大きかったということであろう。氏は、池田説を踏まえ、同国境付近に「坂・越」が多いことを利用度の少ない峠が、坂・越の古名を今に遺し、谷間に咲く山百合のように、ひっそりと息づいているのはまことに奥床しい。と、情感溢れる文で紹介している(『京都北山を歩く１』･ナカニシヤ出版･1989)。

『山城名跡巡行志』(宝暦 4 年･1754 年）には、

「久多より榎ノ木峠に至る。一里。之を榎木越という」というように、「峠」と「越」を併用する記述も見られる。峠を「榎ノ木峠」と称するようになったため、「榎木越」が峠を含む一里の道程を指す言葉として生き残ったに違いない。「坂」も、「雲母坂」「近江坂」に見られるように、「越」より長い道程を表す言葉として定着してきたのであろう。

兵庫の六甲山地に打越峠がある。「打ち越すための峠」と言うより「打ち(語調を整える接頭語）＋越＝峠」であり、結局は「峠」そのものを表していることになる。鴨川上流の雲ケ畑に有名な持越峠がある。死者が出た時に、禁裏の上流として鴨川を汚さないため、棺を隣村へ持ち越した峠であったことによる命名とされてきた。確かに、近年までその風習は残り、峠向こう(真弓方面）に焼き場と埋め墓を造っていた。ただ「持つ＋越＝峠」と理解するなら、特に死穢に限って解釈するのはいかがなものか。旧北桑の周山から日吉に抜ける所にも「持越峠」があり、付近に似た伝承がない以上、「打越峠」と同じように解釈すれば良いのではないだろうか。

さて、「峠」への変化を都文化の普及とすることに異論はないが、その流れを決定的に加速させたのが明治 21 年に発足した陸地測量部であった気がしてならない。全国の地形図を作成する過程で、著名なものを除く多くの坂・越地名を、全国基準の「○○峠」と命名していったのではないか。文献資料による確たる証拠はないが、「○○山」という山名の多くも同じ運命を辿ってきたように思われる。「三峠山」「西谷山」などの名前を見ていると、そう思えてならないのである。　　（つづく）

地名随想２　寺の名の付いた町名　連載 11

妙伝寺町

本会常任理事　清水　弘

妙伝寺町は、下京区西洞院通四条下ルにあり、四条通と綾小路通の間で、西洞院通を挟む両側町である。町名は、ここに妙伝寺という日蓮宗の寺があったことに依っている。現在、妙伝寺という寺は、左京区東大路通二条下ル北門前町、東山二条の南東角にある。

寺伝によると、室町時代の 1477 年（文明９）、日意という僧が、西国の法華門徒が総本山の身延山久遠寺に参拝するには遠すぎるとして、京都に日蓮の遺骨の一部と七面天女の像を納めた法華堂を、一条尻切屋町に建てたという。この「一条尻切屋町」がどこかは分かっていないが、日蓮の遺骨が祀られていることから、この寺は、「西の身延」、「関西身延」と呼ばれるようになった。その後、四条西洞院に移転して大いに栄えたという。

1536 年（天文５）、延暦寺の僧徒による法華寺院の焼き討ちである「天文法華の乱」で、寺は焼けてしまって、堺へ避難した。京都への還住が赦されたのは 1542 年（天文 11）で、妙伝寺が旧地に再興できたのは 1558 年（永禄１）という。

1591 年（天正 19）の豊臣秀吉の都市改造によって、寺は寺町通夷川の東側に移転した。1652 年（慶安５）の洛中図で、この地に寺があったことが確認できる。しかし、1708 年（宝永５）３月８日、油小路通姉小路下ルから出火した火事は、西南の風により燃え広がり、北は今出川、南は四条、東は鴨川、西は堀川の範囲を焼失した。世に「宝永の大火」と

呼ばれる火事である。この火事で妙伝寺をはじめ多くの寺が類焼した。江戸幕府は、この時罹災した寺を鴨川の東の地に移すことにしたので、妙伝寺もこの時に現在地に移転して現在に至っているのである。

地名随想３

京都「七口」のうち丹波口について

本会会員　梅谷　繁樹

１月 22 日に第 45 回地名フォーラムがあり、綱本逸雄氏の「石碑で辿る京の七口」という発表があった。また、清水弘氏の「京の口地名」という報告もあった。それに触発され、それまでに頭にあったことを付け加え雑文をものしたい。

「是より洛中」という標石が、江戸時代のお土居の出入り口 30 ヵ所にあって、乗馬禁止が徹底されていたという。荷車に乗車しなかったら洛中へ運べたのであろう。それなら、牛が引く荷車には何か規制があったのであろうか。この件に触れた文献を承知していないので、たぶん洛中に入れたのであろう。ただ、筆者が知り得ていることで、江戸時代のことであるかは不明だが、丹波口の西およそ 300m辺、現今の七条御前東入北側に牛馬をつなぎとめる長い棒があったという。都合で洛中に入らぬ牛馬はこの辺で小分けをしたのかもしれず、そのような仕事をする人々がいたのではないか。丹波口は他の七口に比して物資の搬入などが多かったのではないか。ここは旧庄屋宅の前で、今はレンタルビデオ屋になっているが、つい最近まで庄屋の屋敷があった。

丹波口は七条通りにあるが、西に出ると今の七条御前（平安京の西大宮通）の西南角に東面して高札場があった。これは享保年中の検地絵図で確認できる。ここに高札場があったため、この辻を札の辻といい、近代になっても札の辻とか札場という呼称があった。丹波口は七条を西へ、丹波に向かう街道で、七条通りは桂川にまで及んでいた。なぜ御前に面して高札場があったのであろうか。推考するに御前通りは西大宮通りで、ここを南に下がると吉祥院や久世から西国街道へ通じるのである。七条と西大宮（御前）を通る人々に向けて、御前に面して札場を設けられたのではないか。もちろん丹波口にもあったかもしれない。御前通りが大切な往来路であったことは高札場の設置場所で分かると思うが、ここを少し南に下がった所に西蓮寺という寺があり、今は境内に天保三年造立の石塔があり、正面に延命地蔵尊、側面に為往来安全とあり、造立者の名も刻まれている。この塔の高さは２mほどの角塔である。元は御前通に面してあったかと思われる。寺の塀は、今は石塀であるが、明治時代は牛をつなぐ場所になっていて、牛が角で築地塀に穴をあけるので石の塀に変えたという。御前通の（西大宮通）はやはり往来の盛んな道路であったのであろう。

さて、丹波口は今日の地名では朱雀に収まっているが、丹波口という地名を残っていない。ところが、丹波口という名は朱雀の西にある西七条で使われ出した。一はマンション、一は店舗名である。ＪＲ丹波口駅から遠いが、一つの目印として、この地名が使われたのであろう。

秀吉造成時のお土居は西側の口が少ない。（長坂口と丹波口）が、これはお土居の西側が農村であったからであろう。江戸時代には口がいくつも開かれたのではないか。

明治時代になって丹波口の西側ではお土居にもたせかけて商品の売買があったというが、外側には堀があったと思う。もう埋められていたのであろうか。後年京都市の中央市場がこの辺にできたのは、往時の因縁があるのだろうか。お土居には茶畑なども作られたらしい。

終わりに「口」という地名で付加できるのは、今、筆者が記録していないので確証はないが、室町期に「河原口道場」という地名があった。この河原口とは七条通りが鴨川に至る地点を指している。道場とは七条道場金光時（七条南、高倉東）とその西南にあった白蓮寺（ともに時宗寺院）の二ヶ寺らしい。

地名随想　**再掲**

比良・八淵の滝の文字石

本会会長　綱本逸雄

滋賀県高島郡高島町黒谷に比良山系・八淵の滝がある。『近江輿地誌略』（寒川辰清、1734 年）に、「八池瀧　畑谷の上、八池山に在り因て瀑布の名とす。大小二瀧あり、大瀧三丈許、小瀧二丈許。蓋云ふ瀧の落つる壷八有り、故に八池瀧といひ又山名とすといふ」とあり、滝が八つあるところからの名称である。『高島郡誌』（高島郡教育会、1927 年）には「滝は八折をなし其落つる所には各淵あり、これ八池（旧八池と書せり、今淵の字を用ひるは幕末の頃漢詩を好む者の用ひ初めしなり）の名ある所以なり、往古は山霊の怒に触れんことを怖れて外来の客を誘ふことを禁じたり」と記す。八滝の一、「七遍返瀧」では「往時旱魃の際は農民此瀧に至りて酒饌を献じ、神主が雨乞の祈祷を」行った。

幕末には京師に景勝地として知られ、文人・歌人が訪れて称えた。安曇川町青柳出身の歌人・中江千別も特産品・高島硯を行商するかたわら、本居宣長の弟子・村田春門らと親交があったが、「足引きの御山もさやにとゝろきて大すり鉢に落る瀧つせ」と詠んでいる。

八つの滝というのは、下流から魚止の滝、障子ケ滝、空戸の滝、大摺鉢、小摺鉢、屏風ケ滝、貴船の滝、七遍返の滝をいい、今日ではこの渓流は関西でよく知られたハイキングコースとなっている。大摺鉢は甌穴（ポット・ホール）といわれるが、岸辺に畳二枚分ほどの自然石（石質・花崗岩）があり、側面に漢字二文字が陰刻されている（写真）。

この文字について巷間、「『八渕』と隷書で、判子の様に、逆さに彫ってある」とか、「八徳」だが、「八徳」は国語辞典に「仁義礼知信忠孝悌の八種の徳目の称」とあるので、これを指すとかいわれている。しかし、このような説明は「滝」と結びつかない。

戦後、この漢字二文字について、「八徳」だと比較的早く指摘していたのは、『高島の民俗』第 5 号（高島町文化協会、1979 年 9 月 1 日）だろう。「『八徳』のいわれ」と題して、同町黒谷の岸田藤治氏の一文が載る。

それによると、「（大正時代）当時の滋賀県知事であった堀田という人が、八ツの渕の『滝』の徳をこの大岩に念じたといい、（同町の）石屋が彫った」という。当時の知事については『湖国百選　石・岩』（1991 年 3 月、滋賀県企画・発行）がもう少し詳しく紹介している。

同書「八淵の滝八徳石」の項に、この滝は「日本の滝百選」に選ばれたが、「『八徳』と篆書体の文字で刻まれています」とし、1922 年（大正 11）堀田義次郎滋賀県知事が視察した時、「八淵の滝の徳を念じて筆をとったものを、石屋が彫った」と記す。残念なことに、掲載写真は、「徳」の行人偏が右側に彫られているので、文字が左右逆と思ったらしく、ご丁寧に表裏反対（裏焼き）にして載せミスを犯している。また、「八徳」の意味については高島町歴史民俗資料館でも不明としている。

では「滝の徳を念じる」とは、どういうことか。

「八徳」というのは「八徳の水」、つまり「八功徳水」の略である。『大言海』は「八功徳水　極楽浄土にありと云ふ水の名。八功徳を具ふと云ふ」。八つの功徳を具えた水というのは、諸説あるが「倶舎論」では「甘・冷・軟・軽・清浄・不臭・飲時不

損喉・飲己不傷腸の八徳」という。「無量寿経」、「称賛浄土経」などの経典にも載る。

「八功徳水」は日本の古典にもしばしば登場し、上層社会や仏教徒達によく知られていた。『栄花物語』18 玉臺に、藤原道長が建てた法成寺の諸堂を浄土の世界に称えたくだりで、「八功徳水澄みて、色々の蓮花生ひたり。その上に仏あらはれ給へり」とあるのをはじめ、『入唐求法巡礼行記』、『往生要集』、『平家物語』、『源平盛衰記』や古辞書の『塵添壒嚢抄』、『下学集』、『節用集』などに載る。長野･善光寺境内にも「八功徳水」と刻んだ大きな水鉢がある。

ところで、これまで注目されることがなかったのは、「八徳」文字の左右にある小さな三つの印刻（篆刻）である。

右側の二文字は「聚気」（気をあつむ）。左側上部の印刻は「字曰義卿」とあり、堀田義次郎の字（別称）はいわく義卿。下部は「涅槃城」と判読できた。下部右側の「火火」は異体字で、涅槃の略字である。「涅槃の城」とは、涅槃（不生不滅の悟りの境地）の不壊にして堅固なことを城にたとえたもの。転じて極楽浄土をいう。

つまり、この大摺鉢の自然石は、経文を刻んだ石塔で刻経塔といい、広くは一字一石塔などと同様に経典供養塔といわれるものである。願主が堀田義次郎で、経典の功徳を得ようとする目的での写経行為とみてよい。堀田は「聚気八徳」、つまり八淵の滝を浄土の水にたとえ、八功徳水の氣を聚て悟りの境地に達する、つまり極楽往生を遂げることを願ったとみてとれる。

なお、「八徳」の書体については、篆書、金文、隷書といろいろ言われている。

だが、大摺鉢の「八」の上部が極端に左右に突き出している字形は金文や隷書に見られなく、篆書特有のものである。「徳」の字形は金文である。行人偏が左右逆の字形は中国の拓本になくはないが、日本の異体字では、旁(つくり)もふくめ、たとえば左右逆・上下逆の文字は供養塔の粮（養）、咏（和）、「杢」（松）、峩（峨）のようによくあり、石仏の陰刻にも用いられている。日本で発行されている篆書辞典類は、よく金文も含めて新旧篆書として扱っているので、八淵の滝の供養塔文字は総じて篆書といってよいだろう。

この渓流はハイカーたちがよく訪れる。この供養塔の上に、土足で大勢で上ったり腰掛けたりして記念写真をとっている光景を見かけるが、堀田の願いを大切にしたい。

この原稿は前号にも掲載しましたが、結末部を誤って掲載しませんでした。改めて全文を掲載するとともに謹んでお詫びいたします。

○●受贈図書及び資料●○

伊賀の國地名研究会様

「いが地名考」（「読売新聞・伊賀版」に連載）314 回（2016 年 11 月 21 日）まで

宮城県地名研究会様

「地名」　第 44 号

熊本地名研究会様

ニュースレター182・183・184 号

岩田書院様　地方情報 131（2016 年 12 月発行）

（お送りくださった関係機関に感謝いたします）

□ **会員出版物紹介** □

清水　弘氏

小説『遷都』三部構成

糸井通浩氏

『日本言語文化研究』第 44 号

城南宮発行「花みくり」に糸井氏が執筆された「源氏物語の植物」（連載 11）が掲載されました。

会費納入の依頼

今年度、または今年度を含む過年度の会費が未納の方は至急納入方、よろしくお願いします。

編集後記

「大阪の女（ひと）」

作詞　橋本　淳　作曲　中村泰士

まるでわたしを責めるように

北の新地に風が吹く

もっと尽くせばよかったわ

わがまま言って困らせず

泣いて別れる人ならば

（歌唱　ザ・ピーナッツ　1970 年 12 月発売）

『都藝泥布』第 57 号をお届けする。

年度更新が近づいているが、和製ポップスシンガー、ザ・ピーナッツは 4 月 1 日の生まれ。健在であれば、二人とも年度が明けると 76 歳になるはずだった。生涯のレコードの総売上数は何と 1000 万枚をこえたという。上記『大阪の女（ひと）』は、伝説の TV 番組『シャボン玉ホリデー』の打ち切り二年前、29 歳の時に発売された。最盛期を過ぎ、引退を意識し始めた彼女たちに提供されたこの演歌調の楽曲は、その複雑な思いとは裏腹に戦後歌謡曲史上に残る名曲となった。

1969 年に発表された『ブルーライトヨコハマ』、『長崎は今日も雨だった』『京都の恋』などが続けてヒットして、70 年代初頭にかけて『よこはまたそがれ』『瀬戸の花嫁』『そして神戸』など「ご当地ソング」の隆盛期を迎えようとしていた。

時あたかも田中角栄元首相によって提唱された「日本列島改造論」（1972 年）は「人とカネとものの流れを巨大都市から地方に逆流させる“ 地方分散” を推進すること」を主旨とした政策提言であり、開発利権をめぐる狂奔が郷土の景観を変貌させようとしていた。元首相の退場後、皮肉なことに整備された鉄道、道路網によって東京一局集中はより顕著になっていった。

「大阪の人」から 47 年、ハナ肇も植木等も谷啓も、犬塚弘一人を残してみんな「スターダスト」（シャボン玉ホリデーのエンディング曲）になってしまった。

今年度、本会の活動にお力添えをいただいたすべての皆様に厚く御礼を申し上げる。来年度は新しい要素を取り入れて、いっそう本誌を愛読していただけるよう努めたい。

（い）

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局　お問い合わせ先

京都地名研究会　事務局　入江　成治

610-1126 京都市西京区大原野上里男鹿町 14-5

Tel　090-6916-6837　　FAX　075-331-3431

E-mail：kyotochimei@gmail.com